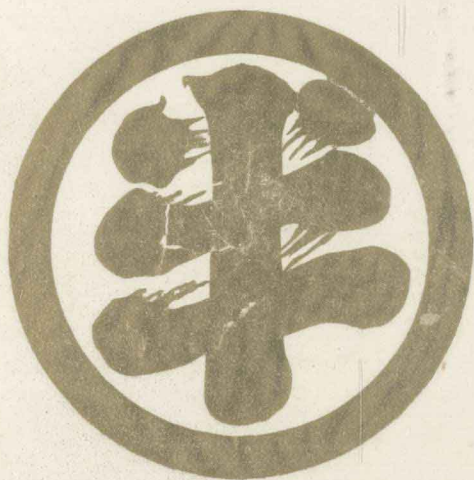




岡本綺堂

定本
半十



同光社版

第五卷

昭和二十五年四月一日印刷
昭和二十五年四月五日初版發行

定本・半七捕物帳 第五卷

定價二五〇圓
地方券價二六〇圓

著者 岡本綺堂

發行者 東京都千代田區神田多町二ノ十一
磯部節治

印刷所 東京都文京區諏訪町五六
株式會社 常磐印刷所

發行所

東京都千代田區神田多町二ノ十一
日本出版協會番號A二〇四〇一五
振替貯金口座番號東京二〇二八八

同光社

半七紹介狀

——序に代へて——

明治廿四年の四月、第二日曜日、若い新聞記者が淺草公園辨天山の惣菜（岡田）へ午飯を食ひに這入つた。花盛りの日曜日であるから、混雜はいふまでも無い。客と客とが膳を押合ふほどに混み合つてゐた。

その記者の隣に膳をならべてゐるのは、六十前後の、見るから元氣の好い老人であつた。なにしろ客が立込んでゐるので、女中が時々にお待遠さまの挨拶をして行くだけで、注文の料理はなか／＼運ばれて來ない。記者は酒を飲まない。隣の老人は一本の徳利を前に置いてゐるが、これも深くは飲まないとみえて、退屈凌ぎに猪口をなめてゐる形である。

花時であるから他のお客様はみな景氣が好い。酔つてゐる男、笑つてゐる女、賑かを通り越してさうさうしい位であるが、そのなかで酒も飲まず、しかも獨りぼつちの若い記者は、唯ぼんやりと坐つてゐるのである。隣の老人にも連れはない。注文の料理を待つてゐるあひだに、老人は記者に話しかけた。

『どうも賑かですね。』

『賑かです。けふは日曜で天氣も好し、花も盛りですから。』と、記者は答へた。

『あなたは酒をお飲みになりませんか。』

『飲みません。』

『わたしも若いときには少し飲みましたが、年を取つては一向いけません。この徳利も退屈凌ぎに列べてあるだけで……。』

『ふだんは兎もあれ、花見の時に下戸はいけませんね。』

『さうかも知れません。』と、老人は笑つた。『だが、芝居でも御覽なさい。花見の場で酔つ拂つてゐるやうな奴は、大抵お腰元なんぞに嫌はれる敵役で、白塗りの色男はみんなシラフですよ。あなたなんぞも二枚目だから、顔を赤くしてゐないんでせう。あはゝゝゝゝ。』

こんなことから話はほぐれて、隣同士が心安くなつた。老人がむかしの淺草の話などを始めた。老人は瘦ぎずの中背で、小粋な風采といひ、流暢な江戸辯といひ、紛れもない下町の人種である。その頃には、かういふ老人が屢々見受けられた。

『お住居は下町ですか。』と、記者は訊いた。

『いえ、新宿の先で……。以前は神田に住んでゐましたが、十四五年前から山の手の場末へ引込んでしまひまして……。馬子唄で幕を明けるやうになつちやあ、江戸つ子も型無しです。』と、老人はまた笑つた。

だん／＼話してゐるうちに、この老人は文政六年未年の生れで、ことし六十九歳であるといふのを知つて、記者はその若いのに驚かされた。

『いえ、若くありませんよ。』と、老人はいつた。『なにしろ若い時分から體に無理をしてゐるので、年を取るとがつくり弱ります。もう意氣地はありません。でも、まあ仕合せに、口と足だけは達者で、杖も突かずに山の手から觀音様まで御參詣に出て來られます。などといふと、觀音さまの罰が中る。御參詣は附けたりで、實はわたしもお花見の方ですからね。』

話しながら飯を食つて、二人は一緒にこゝを出ると、老人は麗かな空をみあげた。

『あゝ、いゝ天氣だ。こんな花見日和はめづらしい。わたしはこれから向島へ廻らうと思ふのですが、御迷惑でなければ一緒にお出でになりませんか。たまには年寄のお附合ひもするものですよ。』

『はあ、お供ませう。』

二人は吾妻橋を渡つて向島へゆくと、こゝもおびただしい人出である。その混雜をくゞつて、二人は話しながら歩いた。自分はたんとも食はないのであるが、若い道連れに奢つてくれる積りらしく、老人は言問團子に休んで茶を飲んだ。この老人はまつたく足が達者で、記者はたうとう梅若まで連れて行かれた。

『どうです、くたびれましたか。年寄りのお供は餘計に草臥れるもので、わたしも若いときに覚えがありますよ。』

長い堤を引返して、二人は元の淺草へ出ると、老人は辭退する道連れを誘つて、奴うなぎの二階へあがつた。蒲焼で夕飯を食つてこゝを出ると、廣小路の春の灯は薄い霧のなかに霞んでゐた。

『さあ、入相の鐘がボーンと来る。これからがあなたの方の世界でせう。年寄はこゝでお別れ申します。』

『いゝえ、わたしも眞直ぐに歸ります。』

老人の家は新宿のはづれである。記者の家も麴町である。おなじ方角へ歸る二人は、門跡前から相乗りの人力車に乗つた。車の上でも話しながら歸つて、記者は半藏門のあたりで老人に別れた。

言問では團子の馳走になり、奴では鰻の馳走になり、歸りの車代も老人に拂はせたのであるから、若い記者はそのまゝでは濟まされなれないと思つて、次の日曜に心ばかりの手みやげを持つて老人をたづねた。その家のありかは、新宿といつても麴橋に近いところで、その頃はまつたくの田舎であつた。先日聞いて置いた番地をたよりに、尋ね／＼て行き着くと、庭は相當に廣いが、四間ばかりの小さい家に、老人は老婢と二人で閑靜に暮らしてゐるのであつた。

『やあ、よくお出でなすつた。こんなところは堀の内のお祖師様へでも行く時のほかは、あんまり用のない所で……。』と、老人はよろこんで記者を迎へてくれた。

それが縁となつて、記者はしば／＼此の老人の家を尋ねることになつた。老人は若い記者にむかつて、色々のむかし話を語つた。老人は江戸以來、神田に久しく住んでゐたが、女房に死別してからこ

こへ引込んだのであるといふ。養子が横濱で賣込商のやうなことを遣つてゐるので、その仕送りで氣樂に暮らしてゐるらしい。江戸時代には建具屋を商賣にしてゐたと、自分では説明してゐたが、その過去に就ては多く語らなかつた。

老人の友達のうちに町奉行所の捕方、即ち岡つ引の一人があつたので、それから色々の捕物の話を聞かされたといふのである。

『これは受賣ですよ。』

かう斷つて、老人は「半七捕物帳」の材料を幾つも話して聞かせた。若い記者は一々それを手帳に書き留めた。——こゝまで語れば大抵判るであらうが、その記者は私である。但し老人の本名は半七でない。

老人の話は果して受賣か、あるひは他人に托して自己を語つてゐるのか、恐らく後者であるらしく想像されたが、彼は飽きまでも受賣を主張してゐた。老人は八十二歳の長命で、明治三十七年の秋に世を去つた。その當時、わたしは日露戦争の従軍新聞記者として滿洲に出征してゐたので、歸京の後にその計を知つたのは残念であつた。

「半七捕物帳」の半七老人は實在の人物であるか無いかといふ質問に、わたしは屢々出逢ふのであるが、有るとも無いとも判然と答へ得ないのは右の事情に因るのである。前にもいふ通り、彼の老人の話が果して受賣であれば、半七のモデルは他にある筈である。若し彼が本人であるならば、半七は實

在の人物であるとも云ひ得る。いづれにしても、私は彼の老人をモデルにして半七をかいてゐる。住所その他は私の都合で勝手に變更した。

但し「捕物帳」のストーリー全部が彼の老人の口から語られたのではない。他の人々から聞かされた話もまじつてゐる。その話し手を一々紹介してはゐられないから、こゝでは半七のモデルとなつた老人を紹介するに留めて置く。

第五卷
目次

半七紹介状	著	者
幽霊の見世物	三	
菊人形の昔	七	
蟹のお角	七	
青山の仇討	一〇	
吉良の脇指	一四	
歩兵の髪切り	一八	
川越次郎兵衛	二七	

廻り燈籠

二六七

夜叉神堂

三〇五

地藏は踊る

三〇七

薄雲の碁盤

三〇五

二人女房

三〇九

跋文

豊島與志雄

半七捕物帳の作者

岡本經一

定本・半七捕物帳 第五卷

幽霊の見世物

七月七日、梅雨あがりの暑い宵であつたと記憶してゐる。そのころ私は銀座の新聞社に勤めてゐたので、社から歸る途中、銀座の地藏の縁日をひやかして歩いた。電車のまだ開通しない時代であるから、尾張町の横町から三十間堀の河岸へかけて、種々の露店が列んでゐた。河岸の方には觀世物小屋と植木屋が多かつた。

觀世物は劍舞、大蛇、ろくろ首のたぐひである。私はおびたぐしい人出のなかを揉まれながら、今や河岸通りの觀世物小屋の前へ出て、ろくろ首の娘の看板をうつかりと眺めてゐると、黙つて私の肩をたたく人がある。振返ると、半七老人がにやり／＼笑ひながら立つてゐた。洋服を着た若い者が、口を明いてろくろ首の看板をながめてゐるなどは、餘り好い圖ではないに相違ない。飛んだところを老人に見つけられて、私は少々赤面したやうな氣味で、あわてゝ挨拶した。老人は京橋邊の知人のところへ中元の禮に行つた歸り路だとか云ふことで、二言三言立話をして別れた。

それから四五日の後、わたしも老人を赤坂の宅へ中元の禮ながらに尋ねてゆくと、銀座の縁日の話から觀世物の噂が出た。ろくろ首の話も出た。

「世の中が開けて來たと云つても、觀世物の種はあんまり變らないやうですね」と、老人は云つた。「ろくろ首の觀世物なんぞは、江戸時代からの残り物ですが、今に廢らないのも不思議です。いつかもお話し申したことがあります、氷川のかむる蛇の觀世物、その正體を洗へば大抵そんな物なんです、つまりは人間の好奇心とか云ふのでせうか、だまされると知りながら、木戸錢を拂ふことになつて。そこが香具師や因果物師の附目でせうね。觀世物の種類も色々ありますが、江戸時代にはお化けの觀世物、幽霊の觀世物などといふのが時々流行りました。

お化けと云つても、幽霊と云つても、まあ似たやうな物ですが、ほかの觀世物のやうにお化けや幽霊の人形がそこに飾つてあると云ふわけではなく、先づ木戸錢を拂つて小屋へ這入ると、暗い狭い入口がある。それを這入ると、やはり薄暗い狭い路があつて、その路を右へ左へ廻つて裏木戸の出口へ行き着くことになるんですが、その間に色々の凄い仕掛けが出來てゐる。柳の下に血だらけの女の幽霊が立つてゐるかと思ふと、竹藪の中から男の幽霊が半身をあらはしてゐる。小さい川を渡らうとすると、川のなかには蛇が一杯にうよくと這つてゐる。そこらに鬼火のやうな焼酎火が燃えてゐる。なにしろ路が狭く出來てゐるので、その幽霊と摺れ合つて通らなければならぬ。路のまん中にも大きな蝦蟇が這ひ出してゐたり、人間の生首が轉げてゐたりして、忌でもそれを跨いで通らなければな

らない。拵へ物と知つてゐても、あんまり心持の好い物ではありません。

ところが、前にも申す通り、好奇心といふのか、怖いもの見たさと云ふのか、かういふたぐひの觀世物はなか／＼繁昌したものです。もう一つには、かういふ觀世物は太抵景品付きです。無事に裏木戸まで通り抜けたものには、景品として浴衣地一反をくれるとか、手拭二本をくれるとか云ふことになつてゐるので、慾が手傳つて這入る者も少くないんです」

「通り抜ければほんたうに浴衣や手拭をくれるんですか」と、私は訊いた。

「そりやあ哭れるには哭れます」と、老人は笑ひながら首肯いた。「いくら江戸時代の觀世物だつて、遣ると云つた以上は遣らないわけには行きません。そんな與太を飛ばせば、小屋を打ち毀されます。併し大抵の者は無事に裏木戸まで通り抜けることが出来ないで、途中から引返してしまふやうになつてゐるのです。と云ふのは、初めのうちは左程でもないが、いよく／＼出口へ近いところへ行くと、ひどく氣味の悪いのに出つ食はすので、もう堪らなくなつて逃げ出すことになる。おれは無事に通つて反物を貰つたなどと云ひ觸らすのは、興行師の方の廻し者が多かつたやうです。その噂に釣られて、おれこそはと云ふ息込みで押掛けて行くと、やつぱり途中でできやつと叫んで逃げて来る。つまりは馬鹿にされながら金を取られるやうなわけですが、前にもいふ通り、怖い物見たさと慾とが手傳ふのだから仕方がない。

その幽霊の觀世物について、こんなお話があります。一體かういふ觀世物は夏から秋にかけて興行